

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第55号 2004.8.1

発行
北海道ポーランド文化協会
〒069-0851
江別市大麻園町28-18
小笠原正明
電話 011-386-3405
FAX 011-387-9016

リレーエッセイ

ジンドブリ・ポーランド

長野克則

1. 家族で二度目のワルシャワ滞在
昨年8月下旬、家族揃って二度目となる第二の故郷と愛して止まないワルシャワに十日間滞在してきました。今回は短い滞在でしたが、何より8歳になる上の娘に加えて、生後9ヶ月の下の娘を同伴してのはらはら・どきどきのワルシャワ訪問でした。ワルシャワでは、私にとって兄貴的な存在であるワルシャワ工科大学のProf. Dominik教授宅の屋根裏部屋(といても立派なものです)に家族4人でお世話になりました。滞

在中、Dominik教授と私は、国際エネルギー機関(IEA)に関するいくつかのミーティング、それに引き続く国際会議(大会長はこのDominik教授)に出席と朝から晩までほとんど家にはおりませんでしたし、また、奥様のMalgosiaさんも今では市立大学の教授であり、国際会議の裏方を司っていましたので家を空けることが多く、

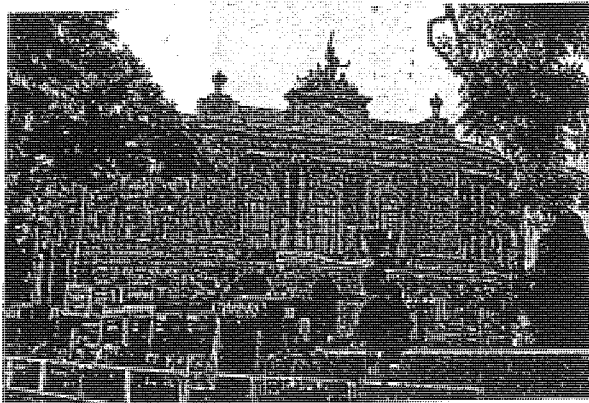
家内と娘達は毎日、前回も数日間滞在させていただいた勝手知った広いご自宅で犬と遊んだり、タクシーやバスを駆使して思い出深い市内の散策やショッピングを楽しんだようです。5年前に比べてモダンに、そして格段にきれいになった街並みと物価上昇には驚いたようです。ポーランドでの学術会議には古き良き伝統が残っており、デイナーパーティとは別に必ず芸術鑑賞が準備されています。前回は国立劇場でのバレエでしたが、今回は旧市街にある大聖堂でのパイプオルガンと宗教曲の合唱でした。これは、Malgosiaさんが大聖堂のコラス隊のメンバーであることで実現した特別なことです。第二次大戦後一つ一つ再建された大聖堂で重厚なパイプオルガンとコラスの夜は家族にとり良い思い出となりました。

2. 初めての海外生活、それがワルシャワ

私たち家族にとって初めての海外生活はワルシャワ工科大学との国際共同研究が始まった1999年夏の2ヶ月半にわたるものでした(写真1)。私にとっても、家内にとっても旅行者として3週間位の海外滞在の体験はありましたが、いわゆる、「住む」という体験はこのワルシャワが初めてであり、それだけ良きに付け、悪しきに付け印象深いものとなりました。Dominik教授とはこれ以前からお



マジエーナ先生とクラコフの繊維会館で遭遇

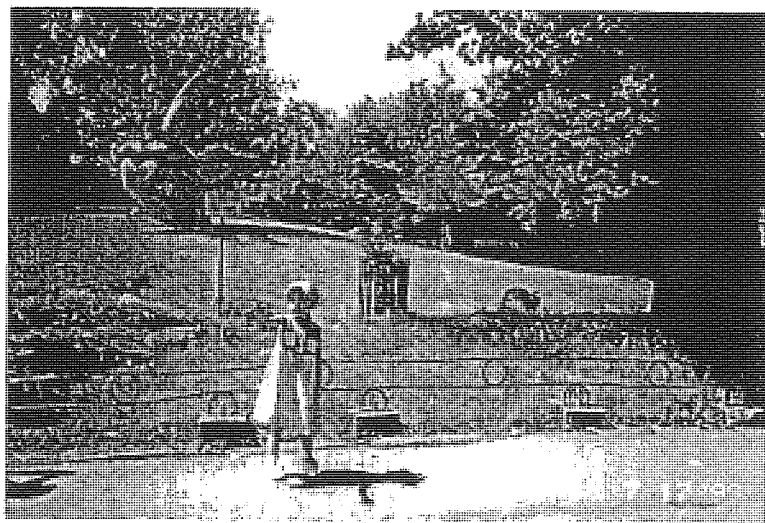


ワルシャワ工科大学本館正面

互いの自宅にも訪問する気心が知れた仲であったので、ワルシャワでの最初の数日間は親子3人でご自宅に泊めていただき、その後市内にある共産主義時代に建てられた典型的な集合住宅、ただし、内部はモダンにリフォームされたばかりの2LDKの一室で生活を始めた。アパートでの生活は快適でしたが、この年のワルシャワは猛暑で、網戸がないので窓を開け放して寝ると蚊に襲われて不快な思いをしたことを覚えています。道端には新鮮なさくらんぼやブルーベリー、木イチゴなどが驚くほど安く売っていたので日本では考えられないくらい豊富に買って食べたこと、また大学のそばのパン屋でポンチキ（小玉の揚げドーナツ）の山を買って帰り3人で平らげたこと、娘は近所の女の子と友達となり遊んでもらったこと、また娘は4歳の誕生日をここで迎えたことなどなどを今でも鮮明に覚えていています。当時のワルシャワは今に比べ、かなりモダンではない街でした。文化宮殿前広場にはまだマーケットがありましたし、Centrumデパートも半分は古いままでした。駅前ロンド付近にはたくさんのお物売りに加え、物乞いも多かったです。また、三周辺には、ベトナム料理の屋台がひしめきあっていました。日本人（私だけ？）の口にあうので、良く中華井とか春巻き、焼きそばなどを食べたり、持ち帰ったりもしました。

た。数年前、不衛生だということでも市当局が全て排除したとのこと。しかしなんといつても、鉄格子のあるショーウィンドウ横のドアを開け、カウンター越しの店員にポーランド語で「こんにちは、それを見せて。そうそう、それ。いや左の、やっぱ右の。、1kgでいくら」などといったやりとりを必要とする人情味ある(?)（実際にはほとんどどの場合、笑顔や愛想といったたぐいのものはないですが。・)商店での買い物は結構気合いのいるものでしたが、これで私のポーランド語(単語のみですが)はかなり鍛えられました。私のポーランド語の先生は家内でした。家内と当時3歳の娘は、この国際共同研究が採択されると同時に貴協会主催のポーランド語講座に通い、片言のポーランド語が話せる位まで教えてもらいました。これが、私どものワルシャワでの生活が通常のもの日本人以上に好印象だったことの一要因になっています。奇遇と言えば、正に奇遇なのですが、滞在中クラコフまで足を延ばしたときのこと、なんと広場の織物会館の中で、マジエーナ先生とフィアンセにばったり遭遇しました。夏休みにフィアンセを家族に紹介するため故郷のカトヴィツェに帰郷してクラコフに遊びに来たこのこと、本当に世間(というか地球)は狭いことを実感しました。

ワルシャワ動物園のジユブラ



ス系のショッピングセンターが進出してきた時期であり、我々も週末毎に排気ガスの煙たいバスに乗り、終点にあるショッピングセンターに買い出しに行ったものでした。家族3人でリュックサックを持ち、1週間分の水、ジュース、牛乳、食品、そしてビールなどを背負ってバスに乗り、下車後は歩道橋を渡り、エレベーターのないアパートの5階の部屋まで階段で登り、ドアの大きな3つの錠前をガツチャン、ガツチャン、ガツチャンと空けると汗が噴き出しました。まさに、荷揚げの“強力”といった風情でしたが、お陰で2ヶ月半使ったリュックの肩ひもの縫い目はほころんで使い物にならなくなりました。今から思えば、当時はタクシーを使っても千円もかからなかったと思います。バス・市電の一週間券を持っていたので使わないと損だという潜在観念がありました。パンとか肉は非常に安いのですが、魚、チーズ、ジュース、菓子類などは結構高く、当時でもこの国の平均給与からすると都市の人々はどうやって生活をしているのだろうと考えさせられました。このスーパで自由に買物できる人間は一部の人であつたはず。それだけ貧富の差も大きく、泥棒などの犯罪が多いため、玄関ドアには3つ以上の錠を付けないと保険が下りないらしく、どのお宅でもガツチャン、ガツチャンとやって

いました。

3. ワルシャワ動物園

私たち家族は、このワイルドで大きなワルシャワ動物園が大好きでした。5年前も毎週のように通いましたし、昨年も4人で行ってききました。また、動物園からの帰り道は旧市街まで歩いて帰ってくることにしています。途中、ビスワ川にかかる橋から見る旧市街は息を飲む美しさがあります。さて、この動物園のどこが好きかと云うと、全ての動物が自然に近いままゲージではなく、広い地べたで飼育されていること、そして、柵もできるだけ低く、一部はガラスを使うなどして動物をできるだけ観察しやすいように工夫されている点が挙げられます。例えば、アフリカ象は今にも飛び出してきそうですし、また、カバのプールの本当は大きくて、2頭が悠々と同時に泳ぎます。かく言う私も、カバが泳ぐ姿を始めて間近で見ましたし、その豪快な泳ぎから金槌の私はカバを尊敬するようになりました。園内の立木の高さから判断するとこの動物園は非常に長い歴史を持つていることが想像できます。こういった動物の配置が古くから行われていることを考えると、日本の動物園のコンセプトの貧しさが恥ずかしくなります。地図から市街地の大きさと比べるとその大きさがわかります。動物園の目玉は何と言ってもヨーロツ

パ・バイソン(ジュブラ)でしょう。お酒好きの方なら云わずと知れたポーランド・ウオツカの代表格のトレードマークとウオツカの名前(ジュブロッカ)となつています。園内の施設は少し古いのですが、ワルシャワ市内名所観光に飽きた方には絶対お勧めです。

4. 私が出会ったポーランド人
自分が大学人でありますので、出会ったポーランド人の多くは大学、もしくは科学アカデミーの研究者とその家族です。また、これらの方々を通じて、何人かの友人のホームパーティや夕食にご一緒させて頂いたたり、ベラルーシ国境近くの農家にホームステイさせてもらったりと、何家族かの素顔や生き様を自分たちなりに感じ取ることができました。一概には云えないかも知れませんが、私の知る限りにおいて、ポーランド人は一旦親しくなると、とことん親切でした。親兄弟でもここまでしてくれないのにと云うところまで、私共家族に尽くしてくれました。日本人の考えでは、それに対しどう恩返ししなければいけないかなどということを考えますが、結局は気持ち対気持ちであると信じています。学者としてのポーランド人ですが、非常に優秀で、特に数学的理論に強いことが特筆されます。しかし、大学は日本以上に上意下達であり、同じ階級同士ではフアーストネームで呼び合う自由

な雰囲気はあるものの、一般的な学生が助手も含め教官に会う場合は、脱帽、コート脱いだり、直立不動で教授と話をします。また、実験室などに教授が用務のため入ってきた場合には「研究員はきちんと起立して「気を付け」の姿勢で指示を受けます。これは、一昔前まで日本でも当たり前前の光景でしたが、現在の私の受け持っている学生ではほとんど見られないことです。レディファーストも徹底していましたし、奥方とレストラシなどに入るときはコートを脱ぎ着のエスコートは必ず夫君の役割です。また、女性と対面するときはハンドキスの伝統もしっかり残っています。正に、古き良き伝統が脈々と息づいており、端から見て非常に新鮮でした。家族の関係では、思春期以降の子供にも親が面と向かって掛ける愛情表面や子の親に対する優しい気持ちの表し方にはいつもすがすがしさを覚えました。日本の若者もこんなだったらしいのと思う場面も多く遭遇しました。一方、都心部のフラットに一家でお住まいの方々は、狭いなりに非常に小綺麗に暮らしておられます。また、助手クラスでも夏休み・冬休みは皆、数週間ずつ、家族で海や森のコテージ、山ヘスキーを楽しんでいます。この習慣は共産主義時代にもちやんとあつたと

のことで、やはり欧州の伝統が引き継がれているのを感じます。東西分裂時代、西の世界には行けないものの、東側だけでも、地中海から黒海、そしてアルプスから東へ連なる山々があり、パカンスには事欠かない様子を当時の家族写真を見せていただき伺い知ることが出来ました。そうではない人も大勢いること、混乱の時期は非常に苦しかったことはわかっていますが、多くの中産階級は、芸術や家族旅行を楽しんで我々日本人よりもずっと心豊かに暮らしています。こういう現実に見るにつけ、日本人の生活はなんでこういつもせかせかしているのだらうと考えさせられずにはいられません。



ベラルーシ国境近くの農村の子供

ポーランドとの不思議な出会い

北海学園大学助教授

(社会学) 犬飼裕一

北海道ポーランド文化協会に入会させていただきましてありがとうございます。私はポーランドの専門家ではないのですが、なぜだかポーランドにつながりができてしまう不思議なこれまでをお話してご挨拶にかえさせていただきます。

最初はドイツのケルンに学会その他で滞在したときでした。ふとしたことからポーランド人の社会学者の団体さんと一緒になりました。ドイツ語と英語のどちらや混ぜたような、それでいて両方のネイティブよりも私には判りやすいような、そんな言葉を気さくに話す人々と仲良くなるのに時間はかかりません。なにやら「ずいぶんときつぷがよいです。太った体と大きな腕で抱きついて背中をトントンとたたいてくれるんですね。食事をご馳走するというのがついていくと、いつ終わるのか見当もつかない宴会がはじまりました。そこで問題となったのが、私の

名前。「ゆういち」という名前が、彼らには「イエジー(Jezzy)」と聞こえてしまう。アルコールの力もあって、次第に「お前はイエジーだ!」ということになり、結果ご当人もイエジーであるご老人が私のポーランド名の名付け親となりました。そうなる、私はイエジー以外の何者とも呼ばれなくなってしまうのであります。帰国後、ポーランドのイエジーから「日本のイエジー」宛のクリスマスカードが送られてきました。こうなると当人も聞き直して、Jezzyをメールアドレスに使うようになりました。

(jerzyinukay@ybb.ne.jp)。
時は流れ、ネット世界の「偽ポーランド人」を長年続けておりますと、別のところからポーランドの社会学者が書いた本を翻訳してくれとのご要望。アドレスがポーランド語になっていくくらいだから、ポーランド社会の専門家

なのだろうとの理解のようです。世の中は広いのですが、ポーランド社会について書いた本を日本語に訳す人の世界は狭いのですね。これには本当に困りました。だいたい「名前」はポーランド語でもポーランド語を勉強したことはない。伝え聞くとところによるとポーランド語というのはヨーロッパ語の中でも難しいので有名であるとのこと。それで急いで問い合わせしてみると、依頼の本は英語で書かれているとのことで一安心。内容の上でも興味が

あるので、安易な気持ちで引き受けることになりました。

これが実は七転八倒の始まりでした。肝心の本は冷戦終結後のポーランド社会が社会主義の制度や文化を乗り越えて次第に資本主義化していく話が軸になっていました。主に理論的・抽象的な議論が続くので私でもなんとか仕事になります。具体的な社会問題となると方々に問い合わせなければなりません。「連帯」事件に際してカトリック教会が果たした役割の話になったりすると誰に尋ねたらよいのか、ということを誰に尋ねたらよいのか困ってしまったりします。最大の難関は、ポーランド人の人名をどうやってカタカナにするのかということでしょうか。おかげでいろいろ勉強にはなりましたが、いまだに不安がなくなつたわけではありません。いつまでもどこまでも疑問が沸いてきて、

終りがみえるのはいつのことになるのでしょうか。翻訳が終わったらクラクフのヤゲウオ大学に著者を訪問しようかと思っているのですが、さていつのことになるやらわからないのです。

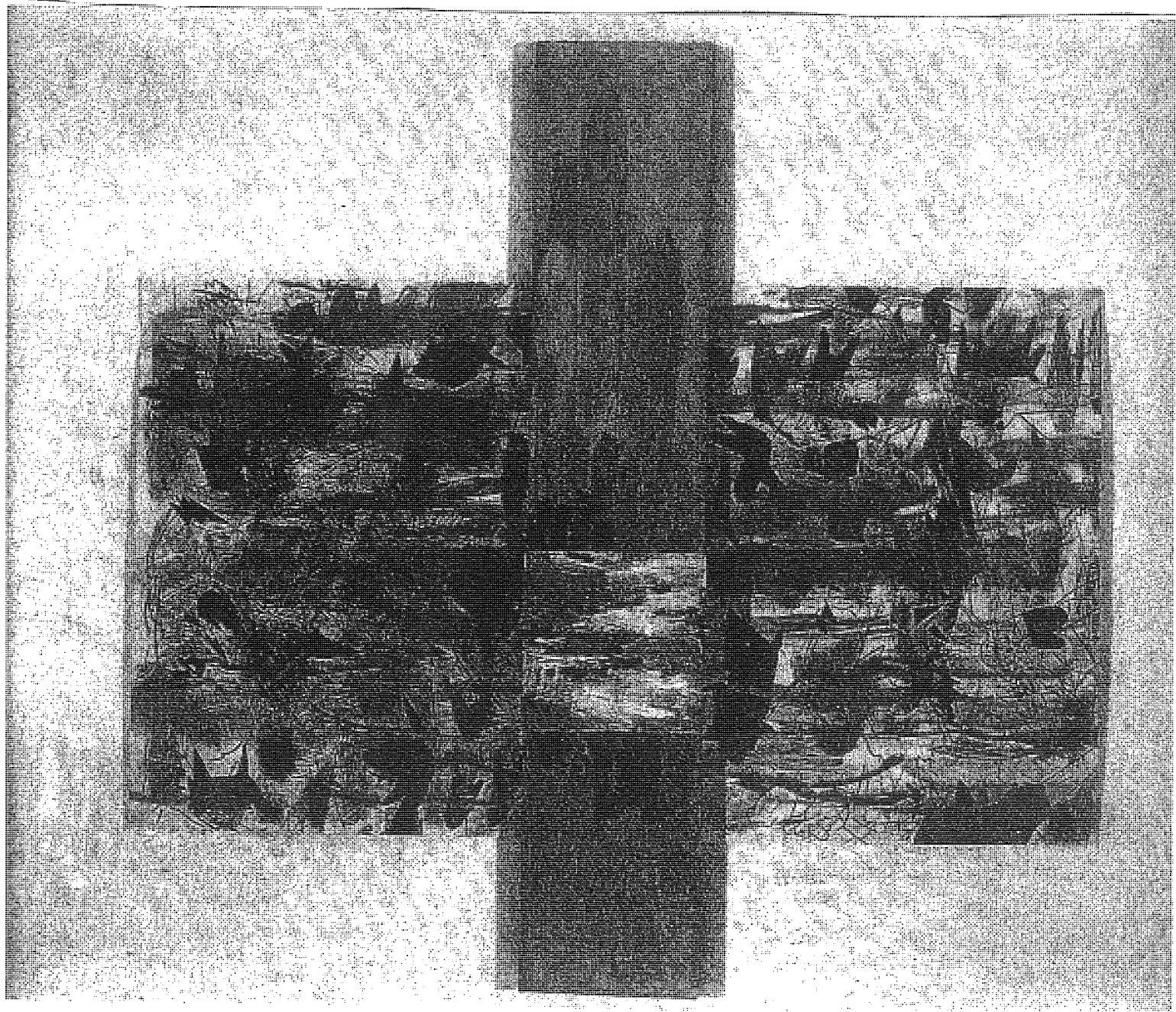
ただし、古くからの知人でポーランド貴族(シユラフタ)の研究をしている人に相談を持ちかけると、なぜか目を輝かせて、「出来る限り協力しよう!」と約束してくれました。みなさんポーランドのことになると目の色が変わってしまうのです。以来ずいぶんお世話になっていきます。

そんなこんなで翻訳に難儀をしておりますと、今度は北海道ポーランド文化協会の三浦さんからお声がかかりました。毎度のことながらポーランドを愛する人々は「イエジー」を決して見逃しません。このあたりは「フランス」や「ドイツ」の愛好者とは情熱が違います。後悔するのやら、実は本音ではうれしくなるのやら、複雑な気持ちがありました。最初は昔から大好きなシヨパンの音楽について何か書こうかと思ったのですが、シヨパンの専門家の三浦さんからの依頼では危険すぎますね。研究者というものはお互い弱点を見せたくないものです。私は元来ドイツが専門なのですが、ドイツとポーランド文化の

比較をすると、隣の国とはいえ、どうしてもドイツの側が中心になってしまいそうです。しかも互いに食べ物や町並みなどで「これこそがドイツ的だ」「ポーランドの独自性だ」といつていることが東洋人の目から見ると区別できなかつたりします。それでしばらくの間あれこれ想いをめぐらしておりました。

いろいろ考えてみても、やはり私にとってポーランドというのは謎なのです。そこに尽きることもない魅力がいくらかもあるのがわかつているのですが、なにか不安で、一旦つかまつってしまったら一生逃げることも出来なくなってしまうような、そんな魔力を秘めているわけです。こんなことを申すのも、私の知人でポーランドに関わっている人々がほとんど例外なく虜になってしまっているからです。

彼らを捕まえて放さないポーランドの魅力とはいったい何なのでしょうか？



ポーランド自転車一人旅

鳴神雅史

1. 何故ポーランドへ？
 2004年3月、ポーランドへ行くチャンスを作り、サイクリングをしてきた。
 しかし14日間という時間的制約から旅の全行程を自転車で行った訳ではなく、自分が訪れた都市周辺を自転車で行き、都市間の移動はバスや電車で輸送（りんこう：自転車を交通機関で運びながら旅行すること）しただけの、いわばハイブリッドな旅である。
 自転車旅行の対象にポーランドを選んだ理由は、アウシュビッツを見たかったこと、同じスラヴ語の国だからロシア語で喋れば旅行の会話なら何とか通じるだろう、という目論見からであった。
 私は現在北海道大学で医学を学ぶ傍ら、総合大学の利点を生かし、放課後にロシア語を習っている。そして自然と隣のポーランド語へも興味があり、以前第3外国語としてポーランド語を習ったことがこの国への興味を持つきっかけとなった。（しかし語彙力はほとんどゼロ！）

そして、旅のもう一つの目的が初の海外サイクリングを実現させることである。北大サイクリング同好会という団体で、これまで北海道はもとより日本国内はもう十分に走ったので、次は外国を走ってみてみたかったのだ。
 しかし海外サイクリングで国内と同じように、ランドナーという種類の少し高価なサイクリング用の自転車を持っていくには勇気が要る。盗られたり、輸送中に壊れたり心配だ。そこでヒントを得たのが海外のNPOのアイデアだ。先進国の放置自転車を、自転車不足の国へ送ろうというというものだ。僕の場合は、拾った折り畳み自転車のフレームに、チェーンなど必要な部品を付けて、足して一台の自転車を製作した。元手は殆どタダ！これなら盗られても壊れてももったいないぞ。そして旅の最後には旅先で友達になった人で自転車が欲しそうな人にプレゼントしよう。
 そしていよいよ、香港経由でドイツのフランクフルトに降り立った。

2. 自転車ユーラシア大陸に
 はじめの一步
 生まれてこのかたずっと日本に住んでいるので、子供の頃から地面に国と国の境目があるのが不思議でたまらなかつた。この線より向こうは外国、という所を自分で体験してみたかった。そこで今回選んだのがドイツ・ポーランド国境である。どちらの国も面倒なビザが不要で、国境地域は平坦なので自転車で走り易い。そしてドイツにはベルリンがある。子供の頃この壁の存在を知って、何でこんな窮屈なものがあるんだらうととても興味を持ったのだ。
 飛行機が着いたフランクフルトからベルリンまで自転車で走るには、3月はあまりに寒すぎ、日程を考えると距離もあまりにありすぎるので、着いたその日に夜行列車でベルリンへ行くことにした。夜行を待つ間、自転車でフランクフルト市内を一周した。子供の頃、自転車に乗れるようになって両親に連れられて近所の公園に行つたのから始まり、札幌市内の知らない地区、北海道のどこか、そして本州、というように段階をふんで次第に自転車による自分の行動範囲は広がった。そして今日、初めてよその国を自分の思いどおり走ったんだ！と思うと感慨もひとしおだ。

会費の納入はお済みですか？

(2003年10月～2004年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

「ポーレ」編集委員会
 小笠原正明・柏倉 涼子
 小林 美保・佐光 伸一
 三浦 洋
 ☎ 011-386-3405
 FAX 011-387-9016
 [連絡先] 小笠原

| | | |
|-----------------|--|--------------------|
| 《会費振込銀行口座》 | | 《郵便振替口座》 |
| 北洋銀行 大通支店 | | 02740-5-19735 |
| (普) 301-0605084 | | 北海道ポーランド文化協会 |
| 北海道ポーランド文化協会 | | 普通会員 (年 額) 3,000円 |
| 事務局長小笠原正明 | | 維持会員 (年額1口) 5,000円 |

いま自分が自転車で踏みしめてい
る大地は日本の小さな島ではなく
て、ユーラシア大陸で、東はロシ
アのデジネフ岬から中国や、東南
アジアからインドに至るまで繋
がった一つの大きな大地なのだ。
まず外国であることを実感できる
のが右側通行であることだ。慣れ
ないと予期せぬ方向から車が自分
へ向かってきて独りであせってし
まう。しかしここドイツではおお
むね日本より運転マナーは良いよ
うに感じた。更に、路側帯には自
転車専用で1mくらい空けられて
いて、路上駐車する車もその上
は停めていないマナーの良さに感
激した。

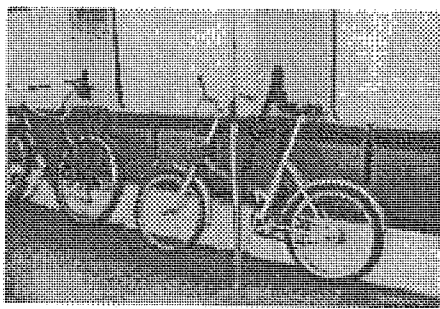
ポーランドへ向かう自転車の旅
はベルリンから始まった。本屋で
「ベルリンの壁地図」を手に入
れ、市内中心部の壁がかつてあつ
た所を自転車で精力的に回った。
かつては自由を求める人たちの往
来を制限していた壁が無くなつ
て、誰もそんなモノがあつたこと
も気に留めないで往来できる今と
いう時代がありがたいものだ、と
思った。

道すがら出会ったドイツ人たち
に、「旧東独は舗装があまり良く
ないけど、西のほうは舗装が良く
て走りやすいよ」と何回か言われ
たことがあつたが、今回僕が走つ
た限りではあまり舗装の質に差は
無いように思えた。ドイツは舗装
の質も良くて平らだし、地形も平
らでとても走りやすい国だ。唯一、

感じられた東西の差は、郊外の道
路では東側では路肩が狭かつたこ
とくらいだ。

ベルリンから国境の街フランク
フルト・オーデルまでは約70k
mある。日本でいつも乗っている
サイクリング用のランドナーなら
全然大したことのない距離だが、
切換えギア無しはこの自転車では
ちよつと厳しい。そこで適当な駅
を見つけたら輪行することにし
た。ベルリンを出て20kmほど
走ったEggenという静かな町で特
急を待つことにした。

この特急には自転車専用列車が
あつて、折り畳まなくてもそのま
ま乗れた。自転車を列車内の壁に
よりかけると、壁からベルトを引



自転車専用列車に揺られる自家製
チャリ

き出してフレームに引つ掛けるよ
うになつていたので自転車は倒れ
ない。同じ駅から乗ったドイツ人
のお兄ちゃんもマウンテンバイク
を持っていた。乗車して彼がする
ように僕もベルトを出して自転車
を立てかけた。広い車中には僕ら
人だけだ。退屈なので独和辞典で
使えそうな単語を拾って手帳に書
き出していったら、そのお兄ちゃん
が「May I help you?」と喋って話し
掛けてきた。道を尋ねるにはどう
言え方がいいのか、などを教えても
らつたあと、お互いの身の上話に
なつた。彼はいま工場で働いてい
るが、給料が良くないので10月か
らドレスデンの大学に入学すると
いう。このお兄ちゃんに限つたこ
とではないが、ドイツの人は道を
探していたりすると親切に手伝つ
てくれる人がとても多い。日本で
は自分も含めてあまりそうした救
いの手を出す機会は少ないように
思う。そしてドイツで感じたの
は、こうして話し掛けてきた人と
話しているうちに、日本から来た
と言うとより一層親近感を前面に
出してくれる人が多いように感じ
た。以前知り合つたドイツ人が言
うには、几帳面に仕事をこなす点
などドイツ人と日本人は性質がと
ても似ているらしい。それと合わ
せて、かつては同盟国かつ敗戦国
という歴史上の共通点があるから
日本人には親切なのだろうか。

ちなみにポーランドの特急にも同
じような専用車があつた。日本で

は自転車は袋に入れないと乗せら
れない、と駅員に言われたが、こ
の自転車に対する寛容さをもっと
見習つてほしいと思う。

3. 自転車での陸路国境越え

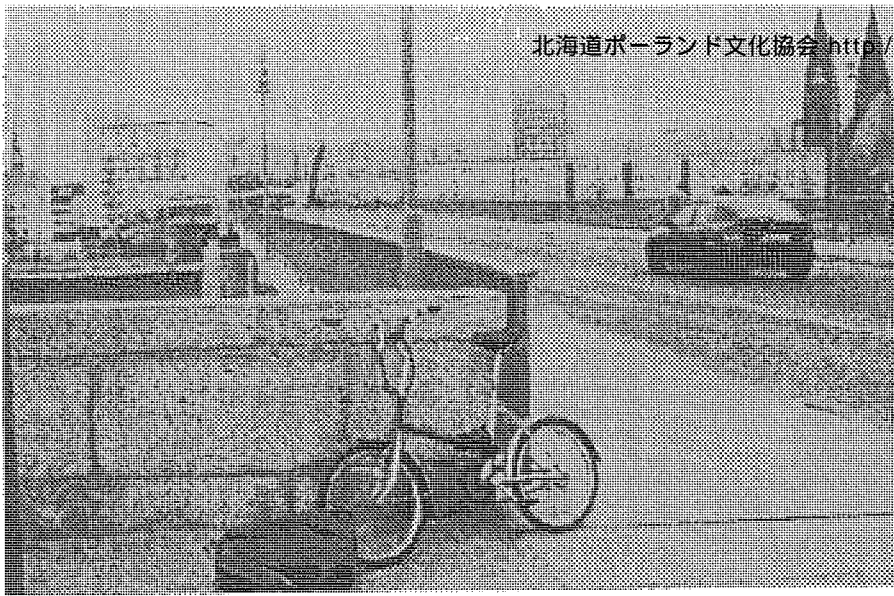
国境の街、オーデルに着いた。
巨大な教会から大きな鐘の音が響
くとても小さな街だ。一刻も早く
自転車での国境越えを体験してみ
たくて、すぐに国境の川へ向かつ
た。河川敷が遊歩道になつてお
り、200mほど先のポーランド
領が手に取るように見える。

「おお！川の向こうは外国だ！」
(こういった素朴だけど強い印象
が読んできて、自分もそこにいる気
がして一番面白い。)と日本に居
ると体験できない風景を暫し味
わつてから、国境検問所を兼ねる
橋へ向かつた。

自転車は徒歩の人と同じく、歩道
の検問所を通れる。車道の検問所
は渋滞だが、こちらはスイスイ行
ける。ドイツ側の係官にスタンプ
を押してもらつと、同じ部屋の仕
切りの東側にポーランドの係官が
座つていた。ポーランドで出会う
初めてのポーランド人に「ジェン
ドブルーイ(こんにはは)」と挨拶
したのが僕の初めてのポーランド
体験となつた。

橋を渡り終えるとスウオヴィツ
ツという小さな町で、道の真ん中
にポーランド国旗がはためき、看
板はポーランド語で、道行く車は
ポーランドのナンバーをつけてい

ドイツ側の国境から見たポーランド

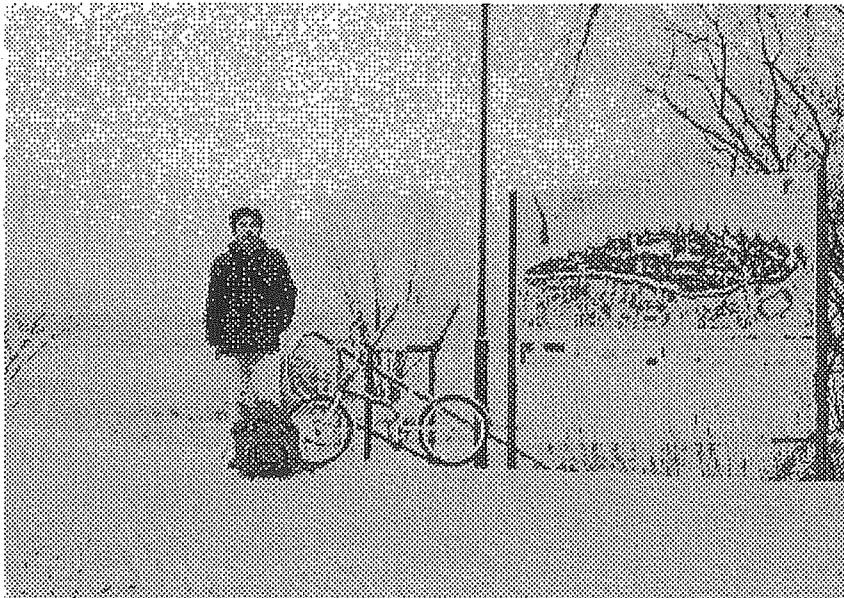


て等々、といろいろなモノたちからさつき居た所と国が変わったのが理解できた。

その国境の橋のたもとで、ホテルを探して地図を見ていたらアルコール臭のぷんぷんするオヤジが近寄ってきて、ポーランド語で何か話し掛けてきた。彼は僕が出会ったポーランドの民間人第一号だ。何やら小銭をくれ、と言っているようなので、ロシア語で「ポーランド語は分からない」と言ったら彼は「パニマユ（ロシア語で：わかった）カネだけ置いていってくれよ」としつこいのでその場を離れた。ロシアでもよく酔っ払いに小銭をねだられたことがあったが、国境を越えてポーランドに入った途端にロシアっぽい人に出会ったので、「さすが！スラヴ人の国だから酔っ払いの多さでもロシアに近くなるのだ！」と勝手に思い込んだ。さらに第一号の遭遇でロシア語が通じたので、やはりポーランドではロシア語が通じるのだ、とも思い込んでしまった。

次に自転車で向かった町ジェピンでは、一応医師を目指す僕にとつて、何が人の幸せなのだろう、と考えさせられる出来事があった。

またその後向かったワルシヤワでは、ここポーランドではやはりロシア語は使わないほうがいいのだ、ということをしみて知るようになった。(つづく)



愛車とご主人

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 55 号 (2004 年 8 月)

目 次

| | |
|-----------------------------|---|
| 長野克則 〈リレーエッセイ〉「ジンドブリ・ポーランド」 | 1 |
| 犬飼裕一 「ポーランドとの不思議な出会い」 | 4 |
| 鳴神雅史 「ポーランド自転車一人旅 (1)」 | 6 |